

## 芸能《三人片輪》における聾啞表象

末 森 明 夫<sup>\*1</sup>, 新 谷 嘉 浩<sup>\*2</sup>, 高 橋 和 夫<sup>\*3</sup>

<sup>\*1</sup> 関東聾史研究会    <sup>\*2</sup> 近畿聾史研究グループ    <sup>\*3</sup> 日本聾史学会

**要旨：**聾啞図像学を内包する聾啞表象研究は、聾啞ないし手話言語に関わりのある現存非文字史料を対象とし、非文字史料に見られる様々な聾啞ないし手話言語に関わりのある事象の検証を行うことにより、聾啞表象を取り巻く様相群の変遷過程を考証する資料としての資料性を明らかにするものである。本稿は聾啞関連事象が見られる芸能各分野における《三人片輪》関連非文字史料ないし文字史料の資料性の考証を行うことにより、芸能全般における《三人片輪》の系譜を作成し、芸能各分野における聾啞関連事象の変遷過程を考証する。

キーワード：狂言、歌舞伎、聾、啞、表象

### 1. 序論

聾啞史研究においては歴史研究全般における動向と同様に文字史料の検証作業が圧倒的優位を占めており、非文字史料の集録および検証作業は大きく後れをとっている。しかし、最近是非文字史料の網羅的集録および電子化に基づく視覚表象的考証の進展が図られ、歴史図像学という用語も提唱されている（黒田2002）。聾啞史学においても、聾啞ないし手話言語に関わりのある非文字史料の網羅的集録および基礎的検証を行い、非文字史料を対象とする聾啞図像学を正當に位置付けることが望まれる。聾啞図像学を内包する聾啞表象研究は、聾啞ないし手話言語に関わりのある現存非文字史料を対象とし、非文字史料に見られる様々な聾啞および手話言語に関わりのある事象の検証を行うことにより、聾啞表

象を取り巻く様相群の変遷過程を考証する資料としての資料性を明らかにするものである。本校執筆者等は上記の観点に鑑み、聾啞非文字史料の集録および考証を行ってきた（末森2013a, 末森2013b）。

古代より芸能においては障害者が扱われることも少なくなく、とりわけ狂言の演目（曲）《三人片輪》は偽啞者が偽盲人や偽躰（いざり）と共に登場し主役を務めることより、聴覚障害ないし言語障害の関連文献において幅広く紹介されてきた（伊藤1941, 伊藤1998, 津名2005, 山本2005）。山本（2005）は狂言《三人片輪》の台本を紹介すると共に、中近世における啞者の様相を考証している。しかし、狂言《三人片輪》以外の芸能分野における《三人片輪》の史的検証を図ったものは管見の限りなく、芸能分野全般における《三人片輪》の史的考証が望まれる。

本稿は啞関連事象が見られる芸能《三

人片輪》に関わりのある非文字史料の網羅的集録および資料性の考証ないし関連文字資料による傍証により、狂言以外の芸能各分野においても《三人片輪》が上演されてきたことを明らかにすると共に、芸能《三人片輪》の系譜化および《三人片輪》に見られる啞関連事象変遷過程の俯瞰的考証を行う。

## 2. 狂言

狂言《三人片輪》は慶長6年(1602年)3月11日(旧暦)に大坂城にて上演されたとの記録があり(宮城伊達・古之御能組1602<sup>1)</sup>、最近も和泉流・野村萬歳家により度々上演されている。狂言《三人片輪》台本の初出典拠は『狂言六義(通称・天理本)』(和泉流)と見られているものの、近世初期の狂言台本群においては『虎明本』(大蔵流)や『続狂言記』(群小流派)にも載録されている。

《三人片輪》に登場する偽啞者が演じ



図1 《三人片輪》(永井2002: 140)

たのは「聾啞」「聴啞」のいずれなのかについては議論が分かれている。ただ、山本(2005: 67)は「登場人物の障害を推定することよりも、当時の社会は障害をどのようにとらえていたかということを考えさせる資料として読むのがいい」と述べており、本稿においてもこれに従うものとする。

『続狂言記』には曲《不見不聞(みずきかず)》が載録されており、留守番を命じられた聾(つんぼ)と盲(めくら)が喧嘩をする内容になっている。ただ、《不見不聞》は江戸時代後半期には廃曲になったものとみられ、現在も上演されている《三人片輪》とは大きな相違を示している。《不見不聞》に登場するのは聾および盲の当事者であるのに対し、《三人片輪》に登場するのは偽啞等を装う博打打であり、このような相違が両者の上演経緯に及ぼした影響を表象学的に考証することが望まれる。

《三人片輪》を描いた非文字史料は管見の限り2件が存在する。1つは近世初期(17世紀初期)に描かれたものと見られる屏風貼絵であり、若衆狂言ないし若



図2 《三人片輪》《観世座能狂言写生帖》国立能楽堂所蔵

衆歌舞伎《三人片輪》の最終場面を描いている〔図1〕（永井2002：140）。この絵には最後の場面で偽啞者を演じた博打打が手にしている啞竹も描かれている。もう一つは近世後期（幕末期）に描かれたものと見られる絵巻物であり、3人の博打打が酒宴を設け偽啞者が舞う場面が描かれている〔図2〕。ただ、この絵には啞竹は描かれておらず、偽聾と偽啞者の區別には慎重な判断が望まれる。

### 3. 歌舞伎

歌舞伎《船岡主馬屋敷（通称：三人片輪）》<sup>2</sup>は竹柴其水（たけしば・きすい）の脚本を元に、明治31年に初めて上演されている。大正時代に上演された《三人片輪》の舞台の様子を撮った写真が数枚



図3 《三人片輪》（伊藤1941：口絵）

残っている（大阪毎日新聞社1926, 国際情報者1927, 歌舞伎出版部1928）。

『日本聾啞秘史』の口絵には歌舞伎《三人片輪》の登場人物3人を描いたものが載録されている（以下、口絵《三人片輪》）〔図3〕（伊藤1941）。尚、国立劇場所蔵の歌舞伎俳優写真に上記の絵に酷似したものがある〔図4、図5、図6〕。両史料を校合した結果、口絵《三人片輪》は歌舞伎俳優写真を参考にしたものであることが窺われた。

### 4. 文楽

文楽（人形浄瑠璃）は歌舞伎と共に発展してきた歴史を持ち、文楽で上演された演目が歌舞伎でも上演されるという例も少なくない。文楽《三人片輪》も歌舞伎《三人片輪》を踏襲した内容で上演され、昭和46年に朝日座、昭和47年に国立劇場小劇場で上演された記録がある。<sup>3</sup> また、竹柏洞主人（1940）は文楽《三人片輪》に関する随筆をしたためている。



（左）図4 5代目中村福助〔啞禿尾〕《船岡主馬屋敷》本郷座（1927）（中）図5 3代目中村時蔵〔盲人半之丞〕《船岡主馬屋敷》本郷座（1927）（右）図6 7代目坂東参津五郎〔聾太郎助〕《船岡主馬屋敷》帝国劇場（1920）（3件とも国立劇場所蔵）

## 5. 舞踊

歌舞伎に組み込まれる形で舞踊《三人片輪》も上演された記録がある（舞踊研究社1938）。

## 6. 宝塚歌劇

宝塚歌劇団は大正15年に花組が《三人片輪》を初めて上演した他、昭和24年にも星組が上演した記録がある。<sup>4</sup>初演時の様子を収めた写真が雑誌に掲載されている（野島1934）。宝塚《三人片輪》は花柳寿輔案、竹原光参作に拠るものであり、歌舞伎《三人片輪》を舞踊劇化したものである。

## 7. 散切物

明治時代初期に「散切物」と呼ばれる現代劇に属する《繰返開花婦見月（くりかえすかいかのふみづき）》が上演された（初演：明治7年）が、この演目は《三人片輪》という通称を持つ。この演目は歌舞伎・浄瑠璃作家として知られている河竹黙阿弥により書かれた（河竹1928）、中途失聴者、中途失語症患者および中途失明者が登場する。渡辺（2011）は『黙阿弥の明治維新』にて散切物《三人片輪》に関する緻密な考証を展開し、明治維新や文明開化を初めとする明治時代初期の社会様相に身体障害の寓意を反映させた河竹黙阿弥の意図を紹介している。

尚、散切物《三人片輪》を描いた浮世絵がある〔図7〕。向かって右側に「ざんぎり左吉（中途失聴者）を演じた市川

左団二、向かって左側に牛や五郎七（中途失語症患者）を演じた中村芝翫を描いている。中途失明者が描かれなかった理由は不明である。

## 8. 民話

村勢（1981）は民話に登場する身体障害者の網羅的調査および全国各地に存在する民話《三人片輪》の史的考証を行い（稲田1989）、民話《三人片輪》に登場する障害者は盲、片目、眇（すがめ）、跛、鼻かけに限られることを明らかにした。

## 9. 時代小説

時代小説『銭形平次捕物』（野村1957）や『浪人暴れ獅子』（真鍋1957）の章見出しには「三人片輪」という用語が用いられている。ただ、各章に登場する障害者（浪人）は盲、跛、三ツ口に限られ、聾者ないし啞者は登場しない。

## 10. 芸能《三人片輪》の系譜

《三人片輪》が上演された芸能分野は、狂言に留まらず、歌舞伎、文楽、舞踊、散切物ないし、宝塚歌劇と多岐に渡っており、身体障害者を笑いの対象に含める《三人片輪》が普通に上演されていたことが窺われる。とりわけ、狂言においては身体障害者、あるいは偽身体障害者を風刺の対象とする演目も少なくない。

しかし、狂言の演目群に登場する身体障害者は盲人が群を抜いて多く「偽啞者」が登場する演目は《三人片輪》の他は管見の限りない（「啞者」が登場する演目

は知られていない)。実際、民話および時代小説における《三人片輪》を勘案するに、一般社会において障害者全般を示す寓意として「三人片輪」という用語を用いるときは聾者ないし啞者は含めない例の方が一般的であり、狂言《三人片輪》のように啞事象が主要題目に含まれる例の方が少ないものとも考えられる。このような事象は「聾啞事象の不可視性」の一環と見なすことも可能である（末森2013a）。

すなわち、芸能分野および民話や時代小説のような非芸能分野における《三人片輪》の状況を俯瞰すると、啞者が登場しない《三人片輪》と、啞者が登場する《三人片輪》の2系統に分かれることが窺われる。前者は民話および時代小説を内包するものの、民話《三人片輪》と時



図7 浮世絵《新板狂言外題尽 久保町牛肉屋の場 繰返開花婦見月》東京都立図書館所蔵

代小説《三人片輪》は直接的なつながりはないものと考えられる。一方、後者は狂言《三人片輪》を源流とし歌舞伎、文楽、舞踊、更には宝塚歌劇に派生表象したのと考えられる。散切物は狂言曲とはかなり内容が異なるものの、歌舞伎・浄瑠璃作家である河竹黙阿弥がしたためたものであることから、狂言《三人片輪》に着想を得たものである可能性は十分にあり得るものとも考えられる（渡辺2011）。

### 10-1 啞札

歌舞伎《三人片輪》に登場する偽啞者役の女形（おやま）は「おし」と書かれた札（以下、「啞札」）を首にかけ、短い棒2本（以下、「啞竹」）を持っている[図4]。啞札の存在を示す史料は以下の2件が挙げられる。高橋（2013）は明治時代中期図解英和辞典類における聾啞表象の集録を行い、啞札を首にかけている聾啞者と推定される挿絵を見つけた[図8]（鳥井1887）。版が粗雑なため啞札と覚しきものに書かれている字を判読することはできないものの、明治20年に刊行された図解英和辞典の挿絵に啞札と推定されるものが見受けられる事象は幕末期と明



図8 「聾」『英語独学 通弁自在正則画引』（鳥井1887）

治時代初期における聾哑表象の継続性を窺わせるものがある。

関根 (1925) は、江戸時代後期に活躍した浮世絵作家 (画家) 大石真虎が失聴した後「つんぼ」と書いた聾札を用いた様子を述べている [図9]。

## 10-2 聾竹

狂言では聾竹が道具として用いられるものの、聾札は用いられない。各狂言台本の内容は大方共通しているものの、相違も散見される (史料の章を参照)。また、現在 (2013年11月現在)、近代デジタルライブラリーで閲覧可能な《三人片輪》狂言台本は6件に上るが、そのうち「竹」という語が見られるのは2件のみ (『滑稽大寄席』『和泉流狂言大成』) である [表]。

山本 (2005: 73) は「聾竹ということばについては、今のところこの狂言以外の文献に見いだすことができません」と述べており、非文字史料および文字史料における「聾竹」の探索が望まれる。このような史料の集録に立脚した《三人片輪》狂言台本の校合および校異の聾哑表象学的考証は別の機会に委ねたい。

## 謝辞

国立劇場所蔵資料を初めとする諸資料の紹介に与った関東聾史研究会の伊藤照美氏および岡本洋氏に深謝致します。

### 非文字史料

作者不明 (幕末期推定) 《観世座能狂言写生帖》国立能楽堂所蔵。  
豊原国周1874《新板狂言外題尽 久保町牛肉屋の場 繰返開花婦見月》東京: 東京都立図書館所蔵。

表 《三人片輪》狂言台本に見られる「聾竹」に関する記述

史料	流派	「聾竹」に関する記述
天理本	和泉流	八寸斗なる竹二本、こしにさいて出る、(中略) 道常のごとく、行付て、竹をたたいて案内をこう、
虎明本	大蔵流	おしはかやうの物を持って、かたかたとたたく程に、
続狂言記	群小流派	道具を用意致してござる。
滑稽大寄席	不明	聾と申す者は此様な短い竹二本たたいてワァワァ、
和泉流狂言大成	和泉流	聾と言ふ者は、斯の様な物をかう叩いて (と云ひて聾竹を叩きテウテウと聾の真似する)

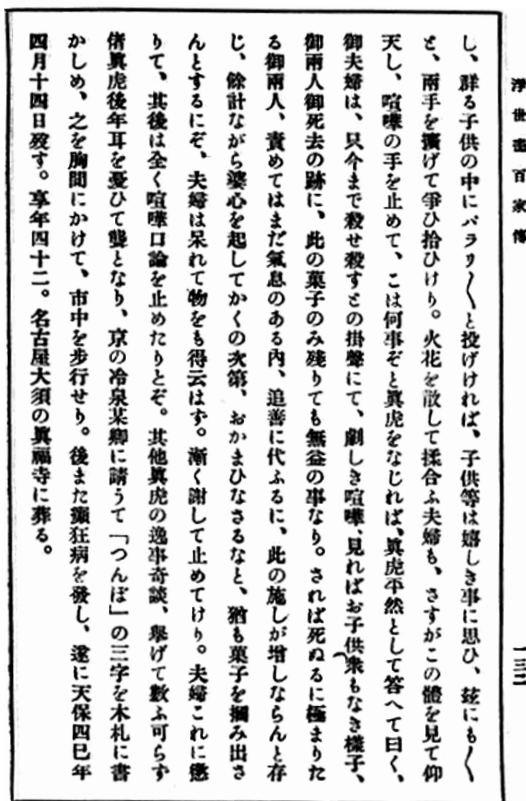


図9 「大石真虎」『浮世』『浮世絵百家伝』 (関根 1925: 132)

鳥井正之助1887『英語独学 通弁自在正則画引』京都市: 須原屋花説堂。

史料（狂言台本）

- 池田広司, 北原保雄1972『大蔵虎明本狂言集の研究』東京：表現社。  
 内山弘1998『天正狂言本 一本文・総索引・研究一』東京：笠間書院。  
 大塚光信2006『大蔵虎明能狂言集 一翻刻・註解一』東京：清文堂出版。  
 金井清光1989『天正狂言本全釈』東京：風間書房。  
 北原保雄, 小林賢次1985『続狂言記の研究』東京：勉誠社。  
 北原保雄, 大倉浩1983『狂言記の研究』東京：勉誠社。  
 一. 1987『狂言記拾遺の研究』東京：勉誠出版。  
 一. 1997『狂言記外五十番の研究』東京：勉誠社。  
 北川忠彦2005『天理本狂言六義（上・下）』東京：参弥井書店。  
 平井川南1907『滑稽大寄席』東京：大学館。  
 古川久1964『狂言古本二種 一天正狂言本・虎清狂言本一』東京：わんや書店。  
 山脇和泉1918『和泉流狂言大成』東京：わんや江島伊兵衛。

参考文献

- 伊藤彝一1941『日本聾啞秘史 言はぬ花』東京：教育研究会。  
 伊藤政雄1998『歴史の中のろうあ者』東京：近代出版。  
 稲田浩二, 小沢俊夫1989『日本昔話通観 第16巻』東京：同朋舎出版。  
 大阪毎日新聞社1926「三人片輪」『芝居とキネマ』3, 7。  
 歌舞伎出版部1928「所作事三人片輪」『歌舞伎』12, 47。  
 河竹黙阿弥1928「繰返開花婦見月」渥美清太郎（編）『日本戯曲全集 第32巻』東京：春陽堂。  
 黒田日出男2002『増補 姿としぐさの中世史 一 絵図と絵巻の風景から一』東京：平凡社。  
 国際情報社1927「三人片輪」『劇と映画』5, 8。  
 小林賢次2008『狂言台本とその言語事象の研究』東京：ひつじ書房。  
 末森明夫2013a「聾啞図像学の構築」日本障害学

会第10回大会。

- 一. 2013b「手話言語の二次元投影におけるアボリア」日本手話学会第39回大会。  
 関根只誠（編）1925「大石真虎」『浮世絵百家伝』129-132, 東京：六合館。  
 高橋和夫2013「明治時代中期の図解英和辞典類における聾啞図像」『聾史会報』（投稿）  
 竹柏洞主人1940「文楽の三人片輪」『謡曲界』51。  
 津名道代2005『難聴 知られざる人間風景（下）日本史に探る聴覚障害者群像』東京：文理閣。  
 永井猛2002『狂言変遷考』東京：参弥井書店。  
 野島一郎（編）1934『宝塚レヴエウ画集』神戸市：岡倉書房。  
 野村胡堂1957『銭形平次捕物全集 第25集』東京：河出書房新社。  
 舞踊研究社1938「三人片輪」『舞踊』5（2）：40。  
 真鍋元之1957『浪人暴れ獅子』東京：和同出版社。  
 村勢雅子1981「民話に見る障害者観 一日本人と偏見一」『リハビリテーション研究』37：22-28。  
 山本正志2005『ことばに障害がある人の歴史をさぐる』東京：文理閣。  
 渡辺保2011『黙阿弥の明治維新』東京：岩波書店。

- 
- 1 野上記念法政大学能楽研究所・演能データベース載録。徳川家康振舞大阪城能；摂洲大阪御城にて内府家康様秀頼公ヲ御ふるまい之御能（宮城伊達・古之御能組1602）曲：翁、高砂、目近米ほね、経政、鼻取相撲、松風、船弁慶、柿山伏、三人片輪、天鼓、鍋八撥、祝言呉服キリ。
  - 2 滑稽歌舞伎ないし滑稽浄瑠璃と書かれている例もある。
  - 3 「文楽演目データベース」  
<http://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/plays/>（2013年9月10日閲覧）
  - 4 「宝塚歌劇歴史年表」  
<http://www.nurs.or.jp/~sug/takara/history/>（2013年9月10日閲覧）